

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25750285

研究課題名(和文)ハンドボール競技におけるヨーロッパ強豪国のユース年代のトレーニング分析

研究課題名(英文)Analysis of training regimens in top European women's youth handball teams

## 研究代表者

山田 永子(YAMADA, Eiko)

筑波大学・体育系・助教

研究者番号：80611110

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本ハンドボール競技におけるシュート力向上に貢献できる知見を得るために、世界のトップレベルにあるクロアチア、セルビア、モンテネグロの国際競技力向上のためのトレーニング組織および環境について調査した。さらにクロアチアのチームが実際に行っているトレーニング、特にシュートに関するトレーニング内容と方法を調査した。その結果、クロアチアのトレーニング内容は、実践形式の中で防御者とGKをかわす技能を習得する個人戦術の向上、シュートとアシストパスを選択しながら行うグループ戦術および個人戦術の向上、そして反復によって技術・体力的な要素を強化する技術力の向上が循環的に行われていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I researched further improvement in international competitiveness in the Croatian, Serbian and Montenegrin handball and examined training regimens in terms of the contents and methods of shooting-play in top Croatian women's youth handball teams. The Croatian training sessions were cyclically covered the skill for fending off defenders and goal keeper, group tactics such as making decisions of assistant pass or shot taken and the individual techniques including physical strength by a repetitive drill.

研究分野：ハンドボールコーチング論

キーワード：クロアチア トレーニング調査 シュート力向上

## 1. 研究開始当初の背景

実際のスポーツ指導現場では、従来の科学的研究法によって得られる知見を実践現場に応用することが難しいため、研究と実践現場の間に距離が生じてしまっている。ゲームにおける成功率・生起率といった目標とすべき数値、技能、戦術を明らかにすること、そして、それらをからだを通して表現できるようにするための指導方法を明らかにする研究が指導現場からは希求されている。ハンドボールの日本代表女子チームは、1976年以降出場権を逃しているオリンピックを目指して現在、強化が進められている。強化の過程において、これまでの国際大会における日本代表女子チームの敗退には、得点力の欠如が大きな原因としてあげられてきた(水上ほか, 1997; 西窪, 2002)がシュートのトレーニングを問題にした先行研究は非常に少ない。シュートに関するトレーニングを調査する際には、トップレベルのプレーヤーが発揮しているシュート動作がすでに自動化された技術である(グロッサー・ノイマイヤー, 2001, pp.69-73)のために、それ以前の育成段階のプレーヤー、すなわちユース年代のプレーヤーを対象にする必要がある。

山田ほか(2011)はユース年代を対象としてトップレベルの国と日本で実際に行われているトレーニングを調査し、ノルウェー、デンマークそして日本のシュートに関するトレーニングの違いについて明らかにしている。今後は、ノルウェー、デンマーク以外のヨーロッパ強豪国において実地調査を進めていく必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本ハンドボール競技におけるコートプレーヤーのシュート力向上に貢献できる知見を得るために、世界のトップレベルにあるヨーロッパ強豪国と日本の15~16歳のユース年代のプレーヤーが所属する競技力の高いチームを対象にして、そのチームが実際に行っているトレーニング、特にシュートに関するトレーニング内容と方法を調査して詳細に分析し、比較検討をすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究では、シュートに関するトレーニングを明らかにするとともに、シュート力向上に効果的な指導を考案するための知見を得るために、以下のことを行う。

- (1) クロアチア、セルビア、モンテネグロにおけるトレーニング環境の実態をインタビュー調査する。
- (2) 実地調査国を決定し、そこでの調査期間、及び調査対象チームを決定する。

- (3) 実地調査を行い、それぞれの国におけるトップチームのトレーニング映像を収集する。
- (4) 実地調査後、収集した映像を分析し、これまでに明らかになっている日本およびスカンジナビアのトレーニング内容とトレーニング方法の相違点を抽出する。

### 分析の観点

スポーツのトレーニングを実施する際に考慮すべき点としてトレーニング内容、トレーニング方法、そしてトレーニングの周辺条件が挙げられている(マトヴェイエフ, 1985; Martens, 1990; 浅見, 1993)。そのうち、トレーニング内容とトレーニング方法はトレーニングを成立させる中心的な条件であると考えられる。そこで、本研究ではトレーニング内容とトレーニング方法に焦点を当て、まず、トレーニング全体の内容を分析する。その後、シュートに関してトレーニング内容とトレーニング方法の2つの観点から分析をする。

### 分析手順の概略

まず独自に作成した分析シートを用いて、トレーニングで行われている事柄を記録し一次資料を作成する。その後、トレーニング全体の内容に関しては、一次資料から、個別のトレーニングの主な目的と、対象としているゲーム局面を明らかにし、目的別、対象局面別にトレーニング時間を算出して、全体のトレーニング時間に対する比率をチームごとに求め比較する。シュートのトレーニングに関しては、一次資料を基にトレーニング内容とトレーニング方法を質的に分析し、チームごとに比較する。

### 分析記録の項目と方法

- ) トレーニング全体に関する項目
  - a. 個別のトレーニングの主な目的
  - b. 個別のトレーニングが対象とするゲーム局面
- ) シュートのトレーニングに関する項目について
  - a. シュートのトレーニングの設定
- ) データの記録および一次資料の作成方法

### 分析記録結果(一次資料)の検討方法

#### ) 信頼性の確認

一次資料の信頼性を確認するために、すべてのチームに関する1回分のトレーニングについて、ハンドボールのプレー歴及び指導歴を有する研究者1名に、ビデオが一次資料として再構成されたときに恣意的に内容が変換されていないかどうかの確認を求める。

#### ) トレーニング全体の内容についての検討

討

トレーニング全体の内容に関しては、個別のトレーニングの主な目的と、対象となっているゲーム局面に関する各項目

について、チームごとにトレーニング時間を算出し、全体のトレーニング時間に対する比率を求め比較する。

）シュートのトレーニング内容とトレーニング方法についての検討

シュートのトレーニングに関しては、一次資料を基に、大谷（2007）の質的データ分析手法

SACTを参考にしながら、以下の手続きに従ってチームごとに検討する。

手続き1として、ステップコーディングを実施する。ここでは、まず、分析シート中の注目すべき語句を抜き出す。次に、抜き出した語句の言いかえを行い、着目した個別的な事象を一般化することあるいは一般的な概念で記述することを検討する。さらに、記述内容を説明することのできる概念、語句、文字列を記入し、記述した語の背景、条件、原因、結果等を検討する。最後に、これまでの検討・分析過程に基づいて、トレーニング内容を再構築し、記述する。

手続き2として、トレーニング実態の文章化を行う。ここでは、データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を考慮し、主に手続き1で記述した個別のトレーニング内容を紡ぎ合わせて、トレーニング全体の流れを文章化する。

手続き3として、トレーニング内容とトレーニング方法をまとめる。ここでは、トレーニング実態が文章化されたものをチームごとにまとめて、トレーニング内容とトレーニング方法を抜き出し、1文あるいは1語で明確に要約する。以上の手続きを踏むことで、分析手続きの明示化、分析過程の省察可能性と反証可能性を高める。

#### 4. 研究成果

クロアチアのトレーニング内容は、実践形式の中で防御者とGKをかかわず技能を習得する個人戦術の向上、シュートとアシストパスを選択しながら行うグループ戦術および個人戦術の向上、そして反復によって技術・体力的な要素を強化する技術力の向上が段階的に行われていることが明らかになった。これまでに明らかになっている日本、スカンジナビア、クロアチアは以下の図1ように示すことができる。

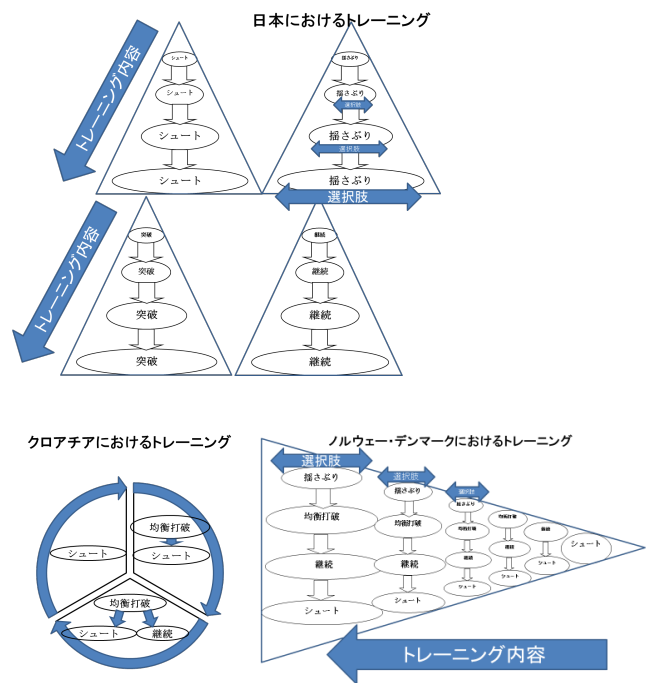


図1. 日本、スカンジナビア、クロアチアにおけるトレーニングのまとめ

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

中原麻衣子, 山田永子, 藤本元, 會田宏: ハンドボール競技におけるセンタープレイヤーの攻撃プレーの特徴: 国内大学女子トップレベル選手を対象に. ハンドボールリサーチ, 第4巻, 1-10, 2015 査読有

山田盛朗, 山田永子: ハンドボール競技における右バックコートプレイヤーの1対1の突破プレー - 右利きと左利きの特徴に着目して - . いばらき健康・スポーツ科学, 第32巻, 25-33, 2015 査読有

Eiko Yamada, Hiroshi Aida, Hajime Fujimoto, Akira Nakagawa: Comparison of game performance among European national women's handball teams. International journal of sport and health science, 12, 1-10, 2014 査読有

Eiko Yamada: Evaluation of attack-contribution in collegiate women's handball. 7<sup>th</sup> International scientific conference on kinesiology proceedings, 1, 422-424, 2014 査読なし

山田永子, ネメシュ・ローランド, 藤本元: 女子ハンドボール競技におけるバックコートプレイヤーのシュートプレー: 世界トップレベルと日本選手の比較検討. ハンドボールリサーチ, 第2巻, 21-29, 2013 査読有

〔学会発表〕(計 3件)

Eiko Yamada: Comparison of trainings for young players in European handball. 1<sup>st</sup> Asia-Pacific conference on coaching science, 2014年7月11日, 北海道大学(北海道札幌市)

Eiko Yamada: Evaluation of attack-contribution in collegiate women's handball. 7<sup>th</sup> International scientific conference on kinesiology, 2014年5月23日, オパティア(クロアチア)

山田永子: ヨーロッパにおけるジュニア・アスリートを取り巻くトレーニング環境 - ノルウェー, オランダ, デンマークを例に - . 日本ハンドボール学会第2回大会, 2014年2月15日, 駒沢大学深澤キャンパス(東京都世田谷区)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山田 永子 (YAMADA, Eiko)

筑波大学・体育系・助教

研究者番号: 80611110